

客室乗務員¹の化粧における距離化のもう一つの意味

Another Meaning of Distancing in Cabin Crews' Makeup

枝 川 碧

Aoi EDAGAWA

(日本女子大学大学院人間社会研究科 現代社会論専攻博士課程後期3年)

要 約

本論文は客室乗務員の化粧を対象とし、客室乗務員の化粧から生じる関係性の多層性を明らかにするものである。客室乗務員の化粧を論ずることで、どのような関係性が明らかになるのか？という疑問にもたどり着けると考えているため、その中で、本論文では、特に距離化の視点を重視することにする。規範的な美しさ、自主性を重視した美しさの研究とは異なる「距離化」という見方を提示し、石井・エリアスの概念に着目する。ただし、距離化にも具体的な関係性と認識的な関係性の2種類があり、本論文では特に後者に注目する。すなわち、本論文では新たに元客室乗務員Cさんや、Aさんの追加インタビューを基に、認識的な関係性における「距離化」を考察する。エリアスの「距離化」の場合、研究者のような視点つまり客観的な視点、石井の場合はメタ認知の視点である。

[Abstract]

This paper focuses on the makeup of cabin crews and clarifies the multi-layered structure of the relationships that arise from the same. How does the makeup of cabin crews clarify the relationships they are in? In this paper, by highlighting the relationship that arises out of the makeup of cabin crews, we emphasize the need for distancing. We present a view of “distancing” that is different from the study of normative beauty and beauty that emphasizes independence and focus on the concepts of Ishii (2011) and Elias (1983). However, distancing occurs in two types of relationships: specific relationships and cognitive relationships. In this paper, we will consider “distancing” in cognitive relationships based on the new interview of retired female cabin crew and an additional interview of active female cabin crew. I adopt a researcher-like perspective, that is, an objective “distancing” perspective, as formulated by Elias, and the perspective of metacognition by Ishii.

はじめに

本論文は客室乗務員の化粧を対象とし、客室乗務員の化粧から生じる関係性及び、その多層性を明らかにするものである。そもそも化粧といっても幅広い行為や活動を示すし、化粧を考察する切り口も様々である。そこで本稿で、まず注目したのが、化粧にはその場のルールに則って行う化粧があるという点だった。その状況状況に合わせて、人は異なる化粧を施している。その時々状況による化粧の違いは、その状況に合うような化粧を行おうとする結果なのではないだろうか。その場のルールというものを考察することで、化粧とは何なのか？という問いの答えを見つける可能性を考えた。

しかし、その場のルールというものは、何となくは多くの人があると分かっている、個人の

受け取り方も異なるだろう。そこで、適切な対象として飛行機に搭乗し仕事を行う客室乗務員に着目した。客室乗務員の化粧には細かな規則があり、会社の求める規定に沿った化粧を行う必要がある存在である。規則に接しながら働く客室乗務員なら、規則に沿った化粧をすることや、したくないという考えなど、様々な考えを持っていると考え、3名の客室乗務員・元客室乗務員を対象とした聞き取り調査を行った。本論文ではその中の2名(Aさん・Cさん)を取り上げる。化粧について聞き取り調査を行なう中で、化粧が様々な人々や客室乗務員自身と切り離せないものであることが分かってきた。客室乗務員の化粧から生じる関係性を明らかにすることで、化粧とは何か?という疑問にもたどり着けると考え、冒頭で述べたように、本論文では客室乗務員の化粧から生じる関係性及び、その多層性を明らかにすること、特に距離化の視点を重視することとする。筆者は、距離化には2つの側面があると考えている。枝川(2018)では具体的な関係性を考察した。今回の論文では認識的な関係性を考察する。

関係性の視点に移る前に、化粧の規範と自主性の対立とも言える考え方に戻る。規則に沿った化粧をすることや、したくないという考えは、規範に従うべきなのかどうか?と言い換えることが可能である。規範に従った化粧について考察する際に有効だと考えられる、Susan Bordoの「文化的なイメージ」への批判(Bordo1997=1999:1)、吉澤夏子の「『美』をめぐる基準」(吉澤1997=2013:191)という「基準」への批判が化粧の規範と関係し、化粧を行う本人の主体性の観点から考える場合に有効だと考えられるKathy Davis (1995=2008)の主体性を重視する見方は、自主性の側の意見として重要である。

ボルドーは、文化的なイメージとの親密な関係について、批判的に論じており(Bordo 1997=1999:1)、現代では懂れる誰かになることが出来ると思える人々が多く、そのように考えるようにさせられていると考察していると言えるだろう。文化的なイメージが常に存在し、押し付けられていることを指摘している(Bordo 1997=1999:8)と考える。

吉澤は、「『美』をめぐる基準」(吉澤1997=2013:191)という「基準」への批判を行っている。吉澤は、客室乗務員を「『いい女』」(吉澤1997=2013:191)「『序列化』の最高位にランク」(吉澤1997=2013:191)されているとみなし、客室乗務員は、「『美』をめぐる基準」(吉澤1997=2013:191)という絶え間ないものに取り巻かれている存在として見ている。

ボルドーの「文化的なイメージ」への批判(Bordo 1997=1999:1)や吉澤の「基準」(吉澤1997=2013:191)への批判は、美しさというものは、社会が求めている存在であり、その存在に従って人は生きているということを示唆していると考ええる。

この美しさを化粧によって作られる美しさとして考えるなら、服務規定という規範に沿って化粧を行う、行わざるをえない存在として、客室乗務員が浮かび上がる。

もう一方の行いたくない(自主性)に関連していると言えるのが、デイヴィスである。デイヴィスは、美を追求することを、女性達の自主性の観点から着目している。デイヴィスは、ボルドーの主張に反対している。美容整形を行っている女性にインタビューを行った結果に基づいて、より美しくなりたいから美容整形をするのではないという説明を行なったり、誰かから圧力をかけられて手術を受けるわけではなく、手術を受けるために、反対を乗り越えることがあること(Davis 1995=2008:161)、美容整形は何となく道徳的に問題があると女性達が考えていること(Davis 1995=2008:162)などと述べている。

しかし、このように、規範に沿って化粧を行う、行ないたくない(自主性、もっと化粧を行いたい、というケースもあるだろう)という二つの領域のみに注目して、客室乗務員の化粧を分析することは、不十分なのではないかという疑問が出てきた。つまり、規範と自主性の観点から、関係性へ視点を変えることが有用なのではないかと考えた。インタビューを行った客室乗務員は、化粧を行うことで、それぞれの「会社のイメージ」や、客室乗務員らしさを表現している。このことは、適切な接近と距離化という概念によって分析することができると思う。また、客室乗務員としての個々の役割を認識して職務にあたっていることが伺えることから、「『美』をめぐる基準」(吉澤1997=2013:191)を絶対視しない生き方があることも前回論文で提示した。

前回の論文は、石井の関係性のスキル及びエリアスの「参加と距離化」の概念から、客室乗務員に親しみを覚える効果をもたらす(接近)、一方で、きちんとした佇まいからは、気軽に何でも声をかけることはしづらい(距離化)という行為を分析し、化粧との関係性を論じた。前回の論文では、エリアスの「参加と距離化」の概念よりも、石井の関係性のスキル視点に重きを置いた距離化の視点を採用していた。つまり、人と人との関係における「距離化」を重視して考えていた。この、人と人との関係における間隔を「距離化」の一つ目の意味、つまり具体的な関係性における「距離化」とする。

本論文では、さらに「接近と距離化」を考察する上で、距離を置いて観察するという意味を重視する。エリアスの「距離化」の場合、研究者のような視点つまり客観的な視点、石井の場合はメタ認知の視点に着目する。エリアスの「参加」、石井の「接近」には、人間の関係性という点は共通する点などを踏まえて考察する。

「距離化のもう一つの意味」の視点を重視することで、認知的、科学的態度である距離化の要素、メタ認知的要素、自己規制要素という様々な要素を含む複合的で奥行きのある関係論を論じることが可能になる。この、認知的、科学的態度である距離化の要素、メタ認知的要素、自己規制要素という様々な要素を「距離化のもう一つの意味」として化粧の関係性を論じることとする。こちらが認識的な関係性である。

第1章 本稿で採用する理論的枠組み

1-0. 本稿で採用する研究者間の関係について

本稿では、「はじめに」で言及したように、石井・エリアス、補足的にホックシールドの説から考察を行っている。石井は、心理学の分野の研究者であり、エリアス、ホックシールドは、社会学の分野の研究者であると言える。心理学の分野にも本稿が触れていることや、3人の共通性について少し述べる。

本稿では、インタビューを分析している。インタビューを分析するには社会学と隣接した心理学を参考にすることは有用である。相手がどのような心情であるのかも踏まえつつ、分析を行なっていくためである。特に石井に注目したのは、石井は距離化の概念に着目しているためである。

エリアスは心理学的傾向のある研究者と言える。後述する「1-3-2.「自己規制の衝動」・メタ認知：石井、エリアス」で引用しているエリアスの文献内で感情について言及していることから、心理学的傾向があると思う。

ホックシールドは、「感情労働」(Hochschild1983=2000:9)に着目している研究者であり、社会学

者の中でも内容及び引用文献からも、心理学要素を取り入れている研究者であると言える。

次に3人の共通性について述べる。

石井は、社会的スキルにおいて、接近が着目される中で、距離化のスキルを重視している。エリアスは、多くの研究者が参加に着目する中で、距離化の視点を重視していると考える。ホックシールドの「感情労働」(Hochschild1983=2000:9)の概念においても、感情は通常、自分のものであるという考え方に對し、感情が自分のものではないという距離を取った存在になるのではないかという考察は、距離化の視点を持っていると言える。以上のことから、3人の研究者の文脈は異なるが、視点は共通したものがあると考ええる。

1-1. 適切な接近と距離化：石井

1章では、客室乗務員の化粧を通じた関係性を考察するために重要であると考え、他者との距離の取り方及びその距離の取り方を司る概念について考察する。

石井は『「メタ・ソーシャルスキル」』(石井2010:114)という概念を提唱し(石井2006)、「メタ認知とスキル行使の交互作用を想定し、各スキルと社会的適応との関係を考察することを目的とする」(石井2010:114)研究を行っており、「状況要因としてスキル尺度に設定されている相手との関係性別条件も含めて吟味する」(石井2010:114)としている。大学生、大学院生を対象とした質問紙調査を行なっている(石井2010:114)。石井の実験的な研究は、コミュニケーションが上手なのか上手ではないのかを決める概念である社会的スキルを紹介するところから始まる(石井2010:111)。

石井は、社会的スキルとして、コミュニケーションを取る本人や相手の関係性、よい結果を生む可能性を指摘して、ネガティブなコミュニケーションに注目している(石井2010:112)。このネガティブなコミュニケーションとは、他者に対し、意図的に距離を取って接するものであり(石井2010:112)、対人的距離化スキルという概念と同様のものとして挙げられている(石井2010:114)。対人的距離化スキルは、「(中略)これまで社会的スキル測定では取り上げられてこなかった回避や欺瞞を含む、内面の気持ちを正直に表明しない、関係を終息させるコミュニケーション行動からなる」(石井2010:113)スキルとして紹介されている。石井は、この対人的距離化スキルと、「(中略)自らの心情を素直に吐露し、関係を維持させていく対人的接近スキル」(石井2010:113)を測る尺度を実験に用いている。石井の今回の実験では、メタ認知という概念も尺度として用いられている。

メタ認知とは、「認知(知覚、記憶、学習、言語、思考など)することを、より高い視点から認知するということ」(NARA UNIVERSITY OF EDUCATION 2011)であり、「メタ認知は、何かを実行している自分に頭の中で働く『もう一人の自分』と言われたり、認知についての認知といわれることがあ」(NARA UNIVERSITY OF EDUCATION 2011)るという。また、メタ認知には、二つの作用があり、一つは、「メタ認知的知識」(NARA UNIVERSITY OF EDUCATION.All Rights Reserved. 2011)で、「認知作用の状態を判断するために蓄えられた、課題、自己、方略、についての知識」(NARA UNIVERSITY OF EDUCATION 2011)である。二つめは、「メタ認知的技能」(NARA UNIVERSITY OF EDUCATION 2011)であり、「メタ認知的知識に照らして認知作用を直接的に調整するモニター、自己評価、コントロールの技能」(NARA UNIVERSITY OF EDUCATION 2011)

となっている。

石井の実験には、大学生及び大学院生が参加しており、質問紙による調査が行われている(石井2010:114)。この質問紙には4つの構成があり、「対人的接近—距離化スキル尺度」、「メタ認知尺度」、「日常事態の情動経験傾向」、「自尊感情尺度」である(石井2010:114)。「メタ認知尺度」は、「自らのコミュニケーションスタイルやコミュニケーション状況についてどれだけ理解しているかについて測定するもの」(石井2010:114)となっている。これは、己のふるまいを自分で客観的に見ることを指している。メタ認知の定義の部分で見た通り、メタ認知の中でも、「メタ認知は、何かを実行している自分に頭の中で働く『もう一人の自分』と言われ」という(NARA UNIVERSITY OF EDUCATION2011)部分が、石井が尺度として用いているメタ認知の考え方と通じるものであると考える。

実験の結果、自尊感情と距離化スキルの低群・高群及びメタ認知低群・高群の関係性を指摘している(石井2010:115)。また、「親密性低条件のネガティブ基本的情動における距離化スキルとメタ認知の交互作用」(石井2010:116)、「親密性低条件のポジティブ自己意識的情動における距離化スキルとメタ認知の交互作用」(石井2010:116)についても指摘している。このことから、「対人的接近—距離化スキル尺度」、「メタ認知尺度」、「日常事態の情動経験傾向」、「自尊感情尺度」(石井2010:114)は関連性があると言える。

この実験的な研究を参考にして、接近スキルと距離化スキルを以下のように定義する。

接近スキルは、人との関係に親しみを与え、関係を保つようにするスキルとする。距離化スキルは、文字通り、人との関係に一定の距離を保つようにするスキルとする。また、石井の研究は、メタ認知に注目して実験を行っている。(石井2010:114)。

1-2. 適切な接近と距離化：エリアス

「接近と距離化」は、Norbert Eliasによる『参加と距離化—知識社会学論考—』(Elias 1983=1991)にも関係している。

(中略)感情関与の強さと深さ、つまり、彼らの考え方に従えば、自分たちの生活に影響を及ぼすことのできるすべての出来事に人間が参加する強さと深さは、距離化、つまり、感情抑制の度合がより強まった場合にみられる特有の問題——すなわち、「これは何だ。なぜこれらはそうなのか」や「これは、私にとって、またわれわれにとっての意味と切り離して、それ自体として見ると、何であるのか」などといった問い——に取り組む余地を少ししか残さなかった。(Elias 1983=1991:85-86)

エリアスが、人々の参加への関心と、それに対して感情を抑える距離化を行っていることに関心を持っていることがわかる。

石井の「対人的接近スキル」(石井2010:113)の「接近」と、エリアスの「参加」の共通点を考察する。先述した大学生及び大学院生が参加した質問紙による調査では、質問紙に4つの尺度が用いられており、「対人的接近—距離化スキル尺度」が含まれている(石井2010:114)。「対人的接近—距離化スキル尺度」には、この尺度を測るために、「親密性が高い人(友人、恋人、家族など)が相

手だった場合、中くらいの親密性の人(サークル・バイトで関わる仲間(友人などは除く)が相手だった場合、親密性が低い人(初対面の人や苦手な人など)が相手だった場合」(石井2010:114)の3パターンの関係性が登場する。つまり、石井の述べている「接近」には、個人対個人のすぐに顔が思い浮かぶ間柄での関係性が前提とされていると言える。

エリアスの「参加」について考察する。

エリアスの「参加」を説明する前に、『参加と距離化—知識社会学論考—』(Elias 1983=1991)に登場するたとえ話を紹介する。19世紀とおそらく設定されているある時代のフランスの将軍と指揮官たちの話である(Elias 1983=1991:86-89)。ある将軍は、地中海の海岸へ早く移動するように命令を受け、急いで軍隊を移動させていた。しかし、軍隊は月食が起これと進むのを断った。指揮官たちによると、「月食は、彼らの信仰によると、その時やりかけているすべての企てを数日間中断せよ、という命令」(Elias 1983=1991:86)であるから、軍隊を移動できないという。彼らの信仰では、「預言者ヨハネが地上の彼の民に一切の活動の即時停止を告げるために、その合図として自分の衣を月にかぶせた」(Elias 1983=1991:86)と考える。将軍は、マッチ箱二つと石で、「月食のメカニズムをわかりやすく説明」(Elias 1983=1991:86)し、指揮官たちも同意したが、『(中略)しかし月が暗くなったのは預言者のわざなのですから、その警告を蔑ろにすることはとてもできない相談です』(Elias 1983=1991:87)と言って、軍隊を移動することを断った。

やっかいなのは、他の場合にもみられるように、コミュニケーションの遮断がこの場合には双方の側で生じている点である。科学的社会の素朴な代表者である将軍は自分自身の体験と思考の基準をあささり合理的、つまり、説明されれば誰にでも理解できるものだ、と見做している。だから指揮官たちのどうしようもない物わकारの悪さを理解できないのである。他方、指揮官たちの方も彼が自分たちの思考方法を全然わかってくれないのが理解できない。(Elias 1983=1991:88)

将軍と指揮官たちの間には、コミュニケーションの溝ができていたことが指摘されている。その上で注目したいのは、「対人的接近—距離化スキル尺度」には、この尺度を測るために、「親密性が高い人(友人、恋人、家族など)が相手だった場合、中くらいの親密性の人(サークル・バイトで関わる仲間(友人などは除く)が相手だった場合、親密性が低い人(初対面の人や苦手な人など)が相手だった場合」(石井2010:114)の3パターンの関係性が想定されている。「初対面の人」も一部含まれているが、それ以外は、身近で人数も比較的少ない人同士の関係と言って差し支えないだろう。石井の関係性に比べ、エリアスが捉える関係性は、将軍と指揮官たちという例から分かるように、公的であり、かつ人数も多い関係性が前提とされていると言える。

われわれが「精霊崇拜」と呼んでいるものを理解するためには、思考と行動の中かなり高度の参加と情緒性のあることを知る必要がある。そしてこれは知識の及ぶ範囲が比較的狭いことと密接につながっていて、危険制御の及ぶ範囲がかなり狭いことを意味している。この最後のことは、また、参加と情緒性の高い度合を維持するのに貢献している。思考と体験がかなり強い情感に満ちていることは、自らの生活にとって重要だと認められるすべてのこ

とが、この段階においては、同時に何らかの人格的存在のなせるわざとして、意図されたものあるいは計画されたものとして受け取られることの中に現れている。科学的社会の構成員は、普通は、人間に喜びや苦しみ——とりわけ、後者——をもたらす出来事が実は生命のない原因、目標をもたない自然のメカニズムもしくはわれわれが「偶然」と呼んでいるものに由来する、全く無意図的な結果であるかもしれない、ということ認識できるようになるにはどれほど高度な距離化、自己抑制、情感の中立性が必要かを知らないのである。(Elias 1983=1991:88-89)

上記の引用によれば、「科学的社会の構成員」(Elias 1983=1991: 89)は、「距離化、自己抑制、情感の中立性」(Elias 1983=1991:89)を行なうことができるということになる。「科学的社会の構成員」(Elias 1983=1991:89)という表現においても、やはり、大勢の人間が想定されていると言える。石井とエリアスの想定する人の多さに違いはあるが、人間の関係性という点は共通していると言える。

エリアスにとって、フランスの指揮官たちが示した月食への対応は、『精霊崇拜』(Elias 1983=1991:88)にあたると言える。そして、『精霊崇拜』(Elias 1983=1991:88)と「参加」(Elias 1983=1991:88)は結びつけて考えられている。対して、フランスの将軍の立場にあたるであろう「科学的社会の構成員」(Elias 1983=1991:89)は、「距離化」(Elias 1983=1991:89)と結びつけられている。「科学的社会の構成員」(Elias 1983=1991:89)は、月食を見て、月食が起こるメカニズムを思い出し、月食を一つの現象であると「認識」(Elias 1983=1991:89)する人々として描かれている。

1-3. 距離化の類似性：石井、エリアス

ここで、石井とエリアスの類似した概念である「距離化」を紹介する。

まず、エリアスの「距離化」の概念の変化について考察する。エリアスは、『諸個人の社会：文明化と関係構造』の「第一部 諸個人の社会(1939年)」において、考察者が、歴史の変化を考察する時の注意点(Elias 1991=2000:60)を述べている。

実際のところ、ある距離を置くときにのみ、つまり一時的な願望と個人的な偏頗を抑えるときにのみ、考察者には、歴史の変化の秩序が、つまり人間のネットワークが緊張の或る強さにおいて——より包括的な統合へであれ、相対的な分裂へであれ——自らを超えて遠心的な力の勝利へと向かう、特有の自然の勢力が明らかになる。このように意識的に距離を置いて得られる認識は、わたしたちが改めて、ここで今、歴史の潮流のまん中で決定を下さねばならない者の目で見ても、その価値を少しも失わない。(Elias 1991=2000:60)

「第一部 諸個人の社会(1939年)」の時代のエリアスにとって、「ある距離を置く」(Elias 1991=2000:60)という条件をつけることにより、歴史の考察者に与えられる特権が書かれている。この時代のエリアスは研究者の視点からの距離化について説明していると言える。

続いて、参加の部分を見ていこう。具体的に参加という言葉が出てきているわけではないが、「歴史の潮流のまん中で決定を下さねばならない者」(Elias 1991=2000:60)という、考察者と対に

なる存在が登場する。エリアスは、この「歴史の潮流のまん中で決定を下さねばならない者」(Elias 1991=2000:60)は、考察者としての認識を持って、現在の生きている中で、何かの決定を行う意義を述べている。「第一部」の時代のエリアスにとっては、「歴史の潮流のまん中で決定を下さねばならない者」(Elias 1991=2000:60)も、研究者のような視点で歴史を眺めることを勧めていることから、「第一部」の段階では、研究者としての観点から、「参加と距離化」を捉えていると言える。そして、「歴史の潮流のまん中で決定を下さねばならない者」(Elias 1991=2000:60)に、研究者のような視点で歴史を眺めることを勧めているということは、どの時代を生きている者も、「距離を置く」(Elias 1991=2000:60)、つまり距離化の重要性を主張していると考ええる。

次に、同じく『諸個人の社会：文明化と関係構造』から、「第二部 自己意識と人間像の問題(1940年代－1950年代)」(Elias 1991=2000)の時代において、エリアスの「参加と距離化」の考え方を見ていく。

「第二部」において、エリアスは、『ルネサンス』以降の人間は、自分を世界の中心と考えず、遠いところから自分を眺めるように、自己意識の新しいレベルへ進むと考えている。

ヨーロッパの中世の社会の人間と比べると、「ルネサンス」以降の人間は、自己意識の新しいレベルに進む途上にあった。自分だけの地球を考えたり、自分自身を世界の中心に据えることをせず、自分自身をいわば遠い所から、世界の中心としての太陽から眺める能力の発達、要するに「コペルニクス的転換」は、それらの人間が徐々に進めていた自己意識の新しいレベルを強く特徴づけていた。(Elias 1991=2000:115)

「第二部」では、ルネサンス時代以降の人間の特徴が述べられているが、その特徴とは、「自分自身をいわば遠い所から、世界の中心としての太陽から眺める能力の発達」(Elias 1991=2000:115)であり、「自分自身をいわば遠い所から、世界の中心としての太陽から眺める能力の発達」(Elias 1991=2000:115)した人々が、「自己意識の新しいレベル」(Elias 1991=2000:115)になってきていると述べている。「自分自身をいわば遠い所から、世界の中心としての太陽から眺める能力」(Elias 1991=2000:115)が、「第二部」の「距離化」を表していると言える。

1-3-1. エリアス「距離化」整理

「第一部」と「第二部」のエリアスの「参加と距離化」の考え方の変化が、「第一部」と「第二部」を通して考察すると分かってくる。それは、「第一部」では、研究者のような視点を重視しており、「第二部」では、「自己意識の新しいレベル」(Elias 1991=2000:115)を重視しているという変化である。「第二部」では、個人へとエリアスの意識が変化していると考ええる。つまり、「第一部」では、客観的な視点を重視しており、「第二部」では、個人という、より人間及び人間関係を重視している。

1-3-2. 「自己規制の衝動」・メタ認知：石井，エリアス

石井の「対人的距離化スキル」と「対人的接近スキル」(石井2010:113)とエリアスの「参加と距離化」の概念は異なるものである。石井の「対人的距離化スキル」と「対人的接近スキル」(石井2010:113)は人々のコミュニケーションに焦点を当てたものであり、エリアスの「参加と距離化」

は、最終的には生きている個人が、考察者としてふるまっていることへと焦点を当てたものとなっている。

ここで、石井の研究を紹介している時に説明したメタ認知が、エリアスとの共通点であることを述べていく。先に紹介したように、メタ認知とは、「認知(知覚、記憶、学習、言語、思考など)することを、より高い視点から認知すること」(NARA UNIVERSITY OF EDUCATION 2011)であり、「メタ認知は、何かを実行している自分に頭の中で働く『もう一人の自分』と言われるたり、認知についての認知といわれることがあ」(NARA UNIVERSITY OF EDUCATION 2011)るというものである。つまり、動いている自分を高い所から眺めている別の自分がいるということであり、自分の思考と観察によって自分を把握することは、石井が述べているメタ認知と共通していると言える。また、エリアスは、単純な社会・または子供だと、自分と他の人を切り離して考えられないと述べており、メタ認知によって自分の関係性を調整する接近スキルと距離化スキルを発揮することとの共通性があると言える(Elías 1991=2000:116)。

(中略)社会的に明確に規定された比較的少ない状況を除いて、社会的に教え込まれた自己規制の衝動——具体的に「悟性」、「理性」、「良心」と呼ばれるもの——は、(たとえそれが本能、感情、思考の性質をもっていようと)他の自然発生的な行動衝動が運動の開始や行動の実行へ向かって直進するのを遮る。感情は、つまり思考と発言において、個人の「外部」に在る世界からの、他の事物と人間からの個人の「内部」の隔離という印象を与える個人の自己知覚は、社会の特殊な発展が進むにつれて増加する個人の自己規制ときわめて密接に結びついている。(Elías 1991=2000:134)

石井の部分で考察したように、メタ認知には、「メタ認知は、何かを実行している自分に頭の中で働く『もう一人の自分』と言われる」という(NARA UNIVERSITY OF EDUCATION 2011)定義があり、この考え方は、エリアスの「社会的に教え込まれた自己規制の衝動」(Elías 1991=2000:134)が、「他の自然発生的な行動衝動が運動の開始や行動の実行へ向かって直進するのを遮る」(Elías 1991=2000:134)働きをしていることと共通していると考えられる。自分の何かしたい、という考えをそのまま行動に移す前に、「『もう一人の自分』」(NARA UNIVERSITY OF EDUCATION 2011)、つまり「自己規制の衝動」(Elías 1991=2000:134)が存在する。

1-4.「感情労働」との類似性・「自己規制の衝動」・メタ認知：石井、エリアス、ホックシールド

次に、「感情労働」(Hochschild1983=2000:9)についての検討を行う。「感情労働」(Hochschild 1983=2000:9)を、エリアスの「自己規制の衝動」(Elías 1991=2000:134)及び石井の部分で考察したメタ認知を前提として考察すると、通じるものがあることが分かった。

(中略)「私は彼女のしたことをそんなに怒るべきではない」とか、「私たちは合意したのだから、私には嫉妬する権利はない」等と私たちは言う。感情管理行為は、単なる私的な行為ではない。それは感情規則の誘導によって交換に役立てられているのである。

(Hochschild1983=2000:19)

ホックシールドによると、「感情規則の誘導」(Hochschild1983=2000:19)があるから、「感情管理行為」(Hochschild1983=2000:19)が行なわれると言える。石井の部分で考察した、「メタ認知尺度」(石井2010:114)と似通った部分として、『もう一人の自分』(NARA UNIVERSITY OF EDUCATION2011)が、感情を見つめているからこそ、何を感じるべきか、感じないべきなのかという「感情規則の誘導」(Hochschild1983=2000:19)がなされると言える。そして、エリアスの「自己規制の衝動」(Elias 1991=2000:134)と通じたものであると言える。

ホックシールドは、「感情規則」(Hochschild1983=2000:19)の現代での使われ方に言及している。

人が、感じたいと思い、感じるだろうと期待し、あるいは感じるべきだと考えていることを感じようと努めるということは、おそらく感情自体と同じように古くからあるものである。感情規則に同調したり、それから逸脱したりするということもまた、決して新しいことではない。組織化された社会においては、おそらく観察可能な行動だけに規則が適用されてきたというようなことは決してなかっただろう。規則が昔から心の行為を抑制してきたことからわかるように、「心の犯罪」は昔から認識されてきている。聖書は、隣人の妻を欲してはならない、感情のままに行動してはならない、と説いている。今の時代の新しさとは、私的な目的のために感情の領域で意識的かつ積極的に演じる私たちの生得的能力を利用しようとする〈道具主義的スタンス〉がますます広がっていることと、このスタンスが巨大な組織によって開発され管理されているというそのやり方である。(Hochschild1983=2000:21)

ホックシールドによれば、「感情規則」(Hochschild1983=2000:19)を基にして演じている人間の能力を使おうとする「〈道具主義的スタンス〉」(Hochschild1983=2000:21)の傾向が拡大しており、しかも「〈道具主義的スタンス〉」(Hochschild1983=2000:21)は、「巨大な組織によって開発され管理されている」(Hochschild1983=2000:21)という。「巨大な組織」(Hochschild1983=2000:21)は、客室乗務員の場合で言えば、働いている会社に当てはまる。つまり、会社は、客室乗務員が、どのように感じ、どのように動くのかを「開発」(Hochschild1983=2000:21)し、「管理」(Hochschild1983=2000:21)していることになる。

しかし、客室乗務員が「〈道具主義的スタンス〉」(Hochschild1983=2000:21)を発揮した会社に「開発」(Hochschild1983=2000:21)や「管理」(Hochschild1983=2000:21)をされているという考え方は、端的に言えば、会社に感情、ホックシールドの翻訳タイトルのように「心」を「管理」(Hochschild1983=2000:21)されているということになる。

エリアスも感情について言及している。

(中略)感情は、つまり思考と発言において、個人の「外部」に在る世界からの、他の事物と人間からの個人の「内部」の隔離という印象を与える個人の自己知覚は、社会の特殊な発展が進むにつれて増加する個人の自己規制ときわめて密接に結びついている。(Elias 1991=2000:134)

上記は先にも引用しているが、エリアスにとって感情とは、「個人の『外部』に在る世界」(Elias 1991=2000:134)と個人の「内部」(Elias 1991=2000:134)という「外部」,「内部」を分ける存在として捉えられている。そして,「外部」,「内部」を隔てる感情も,「自己規制の衝動」(Elias 1991=2000:134)が統率していると言えるだろう。エリアスにとっては、会社ではなく,「自己規制の衝動」(Elias 1991=2000:134)が感情を管理している。

大学生及び大学院生が参加した質問紙による調査が行なわれている石井の実験では、質問紙の構成が4つであり、4つのうち1つに,「自尊感情尺度」、そして「日常事態の情動経験傾向」がある(石井2010:114)。石井の実験においても、感情に注目しているということであり、石井の部分で考察したメタ認知では、メタ認知によって感情が適切に管理されていることがわかる。ホックシールドが述べている会社に感情を「管理」(Hochschild1983=2000:21)されている現状とは別に、個人に元々備わっている設定ともいべき会社に入社するより以前から人が従っているものがあり、それはメタ認知や「自己規制の衝動」(Elias 1991=2000:134)として捉えることができる。そして、メタ認知や「自己規制の衝動」(Elias 1991=2000:134)は、個人的な設定と呼べるものであると考える。人々はメタ認知や自己規制を元に、様々な行為を行なう。メタ認知や自己規制は、人によって異なった傾向を持っているため、メタ認知や自己規制を元に行なう行為は異なって現れてくる。つまり、メタ認知や自己規制を元にした行為は多くの人々が共通に行なっているが、その過程や帰結は多様なものとなりうる。メタ認知や自己規制は様々な関係性から作られ、また関係性に影響を与える。本論で注目する客室乗務員の化粧も、メタ認知や自己規制を通して行なわれる。しかし、客室乗務員の場合は、特に化粧と切り離せない関係性がある。切り離せない関係性ゆえに化粧にがんじがらめになったメタ認知や自己規制になっているかという点、それぞれが異なったメタ認知や自己規制の傾向を持っているため、化粧にがんじがらめになった行為が全て、というわけではなく多様なものとなる。それぞれの人々にとっての化粧・化粧に伴う行為についての具体的な関係性と認識的な関係性を「個人的な設定」と呼ぶこととする。この個人的な設定と呼ぶべきものには、距離化が含まれている。

ここで、個人的な設定とも呼ぶべきものに何が含まれているのかを改めて整理する。まず、人数的な意味での距離化・スキルの意味での距離化が含まれている。距離化には、少人数と大人数の場合がある。距離化は、石井の研究を紹介した部分で考察した対人的距離化スキルも当てはまる。先にも紹介したが、対人的距離化スキルは、「(中略)これまで社会的スキル測定では取り上げられてこなかった回避や欺瞞を含む、内面の気持ちを正直に表明しない、関係を終息させるコミュニケーション行動からなる」(石井2010:113)スキルである。石井の研究では、主に少人数を対象として距離化が考えられている。距離化の大人数の部分に当てはまるのはエリアスの「距離化」である。

次に、距離化のもう一つの意味である認知的、科学的態度である距離化の要素、最後にメタ認知的要素、自己規制要素である。メタ認知的要素、自己規制要素は感情の自己コントロール(会社による管理ではなく、自分でコントロールすること)である。この自己コントロールに関して、何らかの個人的な設定があることになる。

1-5. 石井・エリアス論点整理

ここまで登場した研究者達の論点を整理する。

石井は、親しい人など顔が分かる範囲の人々を主に前提として、少人数・小規模な範囲を考えている。そして、距離化スキルという、一見マイナスとも取れるスキルを評価していることから、距離化を支持していると言える。エリアスは、将軍と指揮官たちの事例や歴史的視点など、大人数・大規模な範囲を考えている。そして、距離化と科学的思考を結びつけ、近代の社会を考察していることから、エリアスも石井とは視点は異なるが、距離化を支持していると言える。

1-6. 着目点

筆者は、航空会社に入社する以前の関係性に注目していることから、個人的な関係にも着目する。石井も主に個人的な関係に着目しているが、筆者の場合は、航空会社に勤務する客室乗務員を対象としているため、飛行機の乗客など、幅広い人間関係に着目しているところが石井と異なる。そして、会社の管理ではなく、個人による自己の管理に着目する。個人による自己の管理には、先に述べた個人的な設定があり、そこには、個人的な関係が影響するという考え方である。

第2章 Aさん²の事例

2-1.Aさんのファンデーションを使わない化粧活動：Aさん自身の客室乗務員時の化粧活動 及びキャリアにつながる化粧（以下2018年9月実施のインタビューより）

本章から、具体的に客室乗務員の事例を考察していく。前提として、客室乗務員の化粧には、細かな規則があり、会社の求める規定に沿った化粧を行う必要があることを述べておく。

この節では、Aさんの勤務時の化粧の方法や、客室乗務員同士とのやりとり、仕事におけるキャリアの観点から、Aさんと勤務規程との関係を考察する。

その前に、高校生の頃のAさんの化粧に関するエピソードを紹介する。

Aさん：家族で…。唯一覚えてるのが、高校生の時の学校の規則がすごく厳しくて、女子もメイクが一切だめだったんですけど、その時に、でも、高校生って一番多感な時に（筆者：そうですね。）メイクとかに一応興味を持つ頃で、やっぱりちょっとビューラーでマスカラをちょっとつけたりとかして（中略）。（a-1）

化粧に興味を持ち出していた様子が伝わる。

そして、客室乗務員となり、訓練中受けていたメイクの指導について同期の人と話した内容について質問した部分を紹介する。

Aさん：やっぱり機内で映えるメイクっていうメイク術だったので、明らかに普段のメイクより一段階二段階濃いメイクを教わったんです。なので（笑い）、こんな実際しないよねって話はしてましたけど。

筆者：あー。実際そのしないよっていうのは日常だったら、しないよねっていう。

Aさん：やっぱり（音声不明瞭）いくら仕事とは言え、こんなに濃い赤い口紅とかその頃流行ってなかったの。10年ぐらい前なので。買うのももったいないよねみたいな（笑い）。（筆者：あー。）あの、□□□（※化粧品会社名）の方に来ていただいて、□□□（※化粧品会社名）のやっぱり、だったらこの辺の色番がいいよ、みたいなこうあのサンプルとかをもらったんですけど、やっぱり□□□（※化粧品会社名）だと高いじゃないですか。

筆者：はい。

Aさん：だから似たようなのをドラッグストアで、じゃ探さないといけないね、とかっていう話とかを。はい、しましたね。（a-2）

化粧品会社からのレクチャーを参考に、サンプルに近い色を探そうとする様子が伝わる。

では、さらに、Aさんの勤務時の化粧の方法や、客室乗務員同士とのやりとり、仕事におけるキャリアの観点から、Aさんと服務規程との関係を考察する。

筆者：その一、素肌に近いって言うの、例えばファンデーション使わないとか、なんかこう具体的に・・・

Aさん：そうです、お粉だけで（筆者：はい。）ファンデーション使わないっていう。（a-3）

Aさん自身は、「ファンデーション使わない」化粧を実践している。Aさん自身は、自らの化粧について以下のように評価をしている。

Aさん：いかにナチュラルに。ただやっぱりお客様からはそんな厚化粧だねとかそういうクレームを一度ももらったことないですし。（筆者：はい、うーん。）かと言ってこう先輩とかとお話してる時に、あの、ファンデーション使ってないんですってかって話すと、あら、じゃちゃんとやってるように見えるねって言われたりとかするので、そんなに好感が持てない顔、あのメイクではないんじゃないかなと思っているので、ま、それでいっかなと思っているので続けてますけどね。（a-4）

筆者：ふーん。・・・じゃあもうこういうところにそのご自身で、お化粧してる時はなんかあの気を付けてるよーっていうこととかありますか？その、CAをされてる時のお化粧で。

Aさん：うーん。

筆者：なんか。

Aさん：あーでもやっぱ…ファンデーション塗らない分、（筆者：はい。）あの、チークとかしっかり塗ったり（音声不明瞭）しないと、血色が悪く見えたりとかする可能性もあるかなと思って。はい。（a-5）

乗客からクレームが来るかどうかや先輩との会話の中で、Aさん自身の化粧がどのように見えるのかを気にしつつ、「血色が悪く見えたりとかする可能性」に配慮するなどして、自らの化粧活

動を続けていることがわかる。

Aさんは、自身が通うエステを後輩や同期に勧めることもある。

筆者：ふーん。その勧めた方っていうのは、後輩？

Aさん：後輩と同期と一人、はい、ずついますね。(a-6)

筆者：じゃあ、あと、まああの厚塗りという、ま、ファンデーション使って、あの、お化粧されてるCAの方も周りにはいらっしやると思うんですけど、なんかそういう方を見てなんかこう思うなとかあったりしますか？

Aさん：いやー、でもマツトにきれいにやってるのが逆に私が普段しているメイクではないので(筆者：はい、うーん。)上手にやってるなーと思うんですけど。ただでもすごいこうやっぱりニギビをうわーってだからコンシーラーで塗って、その上にファンデーションやってっていう、すごい気になる子には実は何名か自分のエステ勧めて実際に行ってもらって良くなってる子とかもいるので(筆者：ふーん。)。全然回し者じゃないんですけど、自分もすごい悩んでたから、良かったら行ってみてって言って。(中略)(a-7)

Aさんは、上記のように、後輩や同期に自分の行っているスキンケア法を薦めているが、Aさんの勧めるスキンケア法を採用することにより、ファンデーションを塗らない、または薄くなるという化粧の仕方は、客室乗務員が提唱されてきた化粧よりも薄いものとなる可能性がある。そのような化粧を行っているAさんは、Aさんの働く航空会社を利用する客から来たクレームを元に後輩を指導する職務も行っている。多くの後輩へ指導をすることとなり、後輩への影響は大きな存在と言える。そのような立場にあるAさんが「ファンデーション使わない」化粧を実践し、仕事におけるキャリアを進めている存在であることは、重要な点であると考えられる。Aさんのような化粧法の客室乗務員が活躍する理由として、「おもてなし」の空気が挙げられると考える。

昨今の航空業界では、「おもてなし」というキーワードが度々登場する。Aさんの働く航空会社でも「おもてなし」の精神が浸透していると言えるだろう。「おもてなし」は航空会社が顧客に対して行うものであると通常は考えられるが、会社と客室乗務員の間にも「おもてなし」の関係があるのではないだろうか。会社が単に客室乗務員へ服務規程を申し渡すのではない関係があるからこそ、Aさんのような化粧を主としない客室乗務員が活躍していると考ええる。

第3章 Cさん³の事例

3-1. Cさんにおける接近と距離化：個人の場合と集団の場合

Cさんの個人レベルでの化粧活動における接近と距離化について述べる。

筆者が化粧を始めたきっかけを尋ねたところ、

Cさん：えーはい。きっかけ2つ、思い出すとありまして。一つが、大学2年生の時に、高校の時に一番仲の良かった友人と化粧品カウンターに行こうって言って、一緒に行って。ほ

んとに遊び感覚で。(c-1)

大学生になり、化粧に興味を持ち、自ら化粧をするための行動を起こしていることがわかる。しかし一方で、「ああ、なんて皮膚呼吸がしづらいいだろうっていうのを覚えていて。(筆者：はい。)はい。ああ、私これ毎日は無理だわって感じだったのを覚えていて。」(c-2)とも話しており、すぐに化粧をすることが好きという感覚ではないことも述べている。

筆者：お化粧してなかった頃は、素颜でいる、素颜でいるのが普通だな (Cさん：はい。)
Cさん：そうですね、素颜が当たり前だったのか。あとなんかお化粧するとスイッチが入りますよね。(筆者：うーん。はい。) なんか今日もやるぞっみたい。朝起きて顔洗って、塗り始めてどんどん変わっていくと、よし今日もあれやってこれやって頑張るぞっみたいな気持ちの切り替わりになったりしますよね。多分制服着てもそうだったんですけど、お化粧もある意味自分のスイッチになっていたのかなって思いますね。(c-3)

化粧を、「気持ちの切り替わり」や「ある意味自分のスイッチ」として捉えていることがわかる。Cさん自身が化粧を積極的に活用していることがわかる。

Cさんの集団レベルでの化粧活動における接近と距離化について述べる。

筆者：先輩からまあ、お化粧とか髪型についてアドバイスを受けた時に (Cさん：はい。) こう思ったとか (Cさん：うーん。) 覚えてらっしゃいますか？
Cさん：うーん。そうですね、その口紅の色薄いかもねって言われた時は、あ、やっぱい変えなきゃって思いましたね。もう、今日絶対帰りに買いに行こう (中略) (c-4)

Cさんは、先輩から化粧に関してアドバイスを受けた時に、「変えなきゃ」と思っていることから、先輩のアドバイスを受け入れる面を持っている。

Cさん：(中略) あと、一緒に長い間一緒にいた後輩の子が、ほんとに真っ赤な口紅をしてきて、どのくらい、ほんとにこのくらい (Cさんが履いていた靴を指していたと思われる)、赤～みたいな口紅をしてきた子がいて。まず、口に目が行くみたいな感じの人がいたんですけど。それはずっと一緒にいたら、いろんな先輩に褒められてて。(筆者：えっ。) 良いね、その色、良いねその色ってすごい言われてて。でも自分はそこまでの赤は着ける勇気は無くなって思ってたんですけど。ほんとに派手な色を着けてくるとこんなに褒められるんだっていうふうに思った記憶はありますね。仕事が出来るとか、お客様対応が良いとかそれとは別に口紅の色ってすごい褒められてて。こんなに褒められるんだっていうふうに思ったのは覚えてます。(c-5)

この発言には、後輩・「いろんな先輩」が登場する。Cさん自身は、「ほんとに派手な色を着けてくるとこんなに褒められるんだ」という思いと同時に、「でも自分はそこまでの赤は着ける勇気は

無いなって思ってた」という発言からは、化粧についての自分なりの考え方をもち、化粧活動を行なっていると言えると考ええる。

Cさん：(中略)一度、ものもらいになってしまった時に、もうこの顔だとお客様にサービスできないなと思って。欠勤したこと、あのお休みしたこともあるぐらいで。(筆者：えっ、そうなんですか。) そうなんですよ。眼鏡、眼鏡もだめなんですね、乗務。何か緊急時のことがあった時に(筆者：あー。)眼鏡は、壊れやすい(筆者：はい。)危険物になっちゃうので。眼鏡も出来ないの。これはお客様に不快感を与えるなって思ったら、もう休む。はい。そんなことありますね。(c-6)

安全上の観点と、「不快感を与える」ということからの判断は、Cさんが顧客に対して、安全で快適な空間を提供したいという考えを表現するために、客室乗務員としての自分(プロとしての自分とも言えるだろう)でいることができないと判断していたのではないかと考える。

Cさんにとって化粧は、その場の化粧の作法や技法を受け入れつつ、「気持ちの切り替わり」や「ある意味自分のスイッチ」として活用するものであることがわかる。

3-2. 化粧としての客室乗務員

Cさんは大学卒業後、客室乗務員になることをCさんの母から反対されたこともあり、大手の会社で事務職として就職し、働いた。その後、客室乗務員へ転職をしている。Cさんは客室乗務員へ憧れる一方で、客室乗務員になることは難しいことであると考えていた。

筆者：狭き門だになっていうの何かこうちょっと調べてみたりとかされたんですか？

Cさん：そうですねー…、調べてたんでしょうかね。エアステージ、立ち読みぐらいいしたのかなー。例えば何年募集100人とかっていうふうに書いてあると、自分の友達でもなりたい人がいるっていうのは知ってたんで、そんなにたくさんなりたい人がいる中で100人の中に自分は入らないだろうなーっていうふうに思ったんだと思いますねー。(c-7)

しかし、客室乗務員への転職について考えていた頃の心境について見てみると、前職の仕事の内容と自分の目指す仕事内容の乖離と大変さもあり、客室乗務員になることの難しさよりも、客室乗務員へなりたい気持ちが勝っていったようである。話している部分を長くなるが、引用する。

Cさん：えー、はい、そうなんです。で、仕事をするってすごいエネルギーが要ることだし、自分の生活のほんとに大部分を占める(筆者：そうですねー。)ことになるんだっていうに初めてその時に思って。でもやっぱり人は働かなきゃいけないから。せっかく働くんだったら自分の好きなこと仕事にできたら良いなって考えが芽生えて。でほんとに自分がやりたいことってなんだろうっていうふうに自分の中の中のこう思いを探っていったら、やっぱりその小学校の時に憧れた、あの仕事だなーっていうふうに思って。で、自分がそのCAになったらどうなんだろうっていうことを考えると、ほんとにもうなんか夜も眠れないくらいわく

わくしてきちゃう感じなんですね。(筆者：へー。) なんか妄想もそういうあって。えへへへ(笑い)。それが仕事にできたら幸せだなって思っ。(c-8)

Cさんは、客室乗務員への憧れが強く、「夜も眠れないくらいわくわくしてきちゃう感じ」と述べている。Cさん自身は一度あきらめた客室乗務員になるという夢を叶えることによって、自分へのさらなる自信を身に着けていたのではないかと考える。

3-3. 化粧という制服

ここで、Cさんにとっての個人的な設定について考えていく。

まず、Cさんの中学時代の部活動について話している場面である。

筆者：いやいやいや(音声不明瞭)。ちょっと、すみません(音声不明瞭)。ちなみにですけど、その剣道部に入ろうと思った理由って何かあるんですか？全然違いますけどね。

Cさん：ほんとですね(笑い)。(筆者：はい。) そんな時はたまたま仲が良かった子が剣道部にいたっていうのと、あとは袴に憧れた。(筆者：あー。) なのかなー(?)。うーん。あとバドミントン部がすごく厳しかったんで、そこまで厳しくなくて、楽しそうだし、袴も履いてるしみたいな、すごい不純な理由(笑い)。(c-9)

「(中略)あとは袴に憧れた。」という理由もあり、Cさんは、バドミントン部から剣道部へ転部している。

次に大学時代のアルバイトの話をしている部分を紹介する。

筆者：ケンタッキーとかそのフレッシュネスバーガーとか、なんか選んだ理由とかって覚えてらっしゃいますか？

Cさん：(笑い)。

筆者：(笑い)。

Cさん：それもすごい不純で、サンバイザーがつけたかったんですよ、ケンタッキーの時は(笑い)。

筆者：あーっ、確かに、被ってますよね。

Cさん：ねー、そうなんです。

筆者：被ってますよね。着けてますよね。

Cさん：はい。で、サーティーワンと悩んで。

筆者：あ、サーティーワンと。

Cさん：サーティーワンもサンバイザー着けてて(笑い)。

筆者：あ、うーん。着けますね。(c-10)

「(中略)サンバイザーがつけたかったんですよ」という理由が、アルバイト先を選ぶ選択肢の一つになっていることが伺える。

続いて、Cさんが、客室乗務員になろうと思った理由や、客室乗務員のこういった部分に惹かれたのかについて話している中でのCさんの発言を紹介する。

筆者：すみません、次の質問なんですけれども、客室乗務員になろうと思ったきっかけを教えてください。

Cさん：はい。これも考えると二つ、きっかけがありまして。まず一番最初に思った時が小学校高学年の時に父親が転勤で大阪にいまして。そのの、その父親に会いに行く時に乗った初めての飛行機で。はい。ああ、CAさんて良いなあと思ったのが最初のきっかけですね。多分羽田大阪とかですごい短い時間だったと思うんですけど。なんか優しそうで、品が良さそうでなんかきれいな感じだなんていうふうに漠然と思ったのが、なんか自分がこんなふうにこんな女性になりたいなっていうのがリンクしたんだと思いますね。それが初めてのきっかけでした。(中略) (c-11)

「なんか優しそうで、品が良さそうでなんかきれいな感じだなんていうふうに漠然と思ったのが、なんか自分がこんなふうにこんな女性になりたいなっていうのがリンクしたんだと思」ったというCさんにとっての理想像を表す存在が客室乗務員であると言える。

筆者：そうですねー、例えばそのー、あ、えっと小学校高学年の時に父様に会いに行くためにその、大阪まで飛行機に乗って、CAさん素敵だなと思われたということなんですけれども、具体的にこういうその例えばCAさんの行為を、とか発言しているんですかね、見てて良いなって思ったとかっていうことはありますか？

Cさん：うーん、そうですね、短い便だったんで、あんまりこれといったエピソードも無いんですけど、多分飲み物配っている姿だけを見て、ああ素敵だなんていうふうに思ったんだと思います。その…優しそうな感じとか、にこにこしてる感じとか。はい。

筆者：あ、そうですか。その小学年、小学校、小学校の高学年の時に、あ、ちょっとここ良いな優しそうだなんて姿を見て、それからそのまえーと中学校、高校、大学と上がってく中で、その気持ちっていうのはこう持ち続けてた感じですか？

Cさん：そうですねー（筆者：それとも、はい。）はい。(c-12)

Cさんが「(中略)優しそうな感じとか、にこにこしてる感じ(中略)」に惹かれていることが分かる。

次に、Cさんが、飛行機や空港への感想や制服の衣装要素について言及している部分を紹介する。

Cさん：その後にも何回か飛行機に乗る機会があって。一回中学生の時にシンガポールに初めて、海外に初めて行ったのがシンガポールで。その時もシンガポール航空に乗ったんですよ。でもあの制服の、きれいじゃないですか。(筆者：はい。)もう漠然と飛行機が好きで。何でかわかんないんですけど、その、空港に行ったらワクワクする感じとかが大好きで「すご

い好き」どちらか。)。 (筆者：へー。) で、あの制服を着てちょっとエキゾチックで、あの姿でサービスをしているのが素敵だになっていうふうに、その気持ちを増したことを覚えていますね。はい。(c-13)

Cさんは、中学生の頃の部活での「袴」、大学生の頃のアルバイトでの「サンバイザー」、客室乗務員の「制服」など、衣装要素を求めていると言える。

次に、Cさんの学生時代と、客室乗務員である頃の変化について聞いている部分である。

筆者：おー。その時にはあの、最初の時には、お化粧、えっと高校生の頃はね、(Cさん：はい。) あんまり、振り返るとそんなにじゃなくて、大学生の時はちょっと皮膚呼吸 (Cさん：(笑い)) って。で、その頃から見たらお化粧に対する意識っていうなんか変化があったんでしょうか。

Cさん：はい。だいぶ変わりましたね。ほんとに。うーん、その当時、高校生ぐらいの当時は、もうプラスアルファ程度でやるものだったのが、もう、ほんとに、その、入社してからは、身だしなみの一環とか、服を着るのと同じような感覚で、逆にもう素顔で人前に出られないっていうぐらいになってると思いますね。(筆者：うーん。) 今でも、そうですけど。はい。(c-14)

「(中略)身だしなみの一環とか、服を着るのと同じような感覚で、逆にもう素顔で人前に出られないっていうぐらいになってる」という話からは、化粧と服が一体となっていることが伺える。

Cさんが思う化粧について尋ねている部分を紹介する。

筆者：最後なんですけれども、まとめとしてなんですが (Cさん：はい。) 何をすることが、化粧だと思いますか？

Cさん：そうですね、(筆者：はい。) ほんとに仕事してる時と、今の状況とかで全然違うと思うんですけど、やっぱり勤務時の話ですよ。CAとして。

筆者：あ、えーっと、あの、どちらも、もし (話) していただけたら。

Cさん：あっ、はい。やっぱりCAの時は化粧＝もう制服を着るってことと一緒に、身だしなみの一環として。例えば、自分が苦手な濃い色の口紅もしなきゃいけないので、そこはもう、これをやりたい、やりたくないって気持ちはもう全部排除して。制服を着る感覚で、化粧をしていたっていうことだと思いますね。あとは、制服自体も派手なので、制服に負けない顔を作るっていうようなことと、あとお客様に不快を、不快感を与えないようにってことです。 (中略) (c-15)

「化粧＝もう制服」とCさんが言っていることや、部活動やアルバイトでの衣装的要素の意味が強い制服への憧れなど、Cさんにとっての制服の意味合いの強さが伺える。よって、Cさんの個人的な設定は、「化粧という制服」となると考える。

「なんか優しそうで、品が良さそうでなんかきれいな感じだになっていうふうに漠然と思ったの

が、なんか自分がこんなふうになんか女性になりたいなっていうのがリンクしたんだと思」ったという発言や「(中略)優しそうな感じとか、にこにこしてる感じ(中略)」という発言からは、内面的に目指す人物像を窺い知ることができる。つまり、Cさんにとっての「化粧＝もう制服」には、Cさんの内面的な人物像を表から補強したり、内面的な人物像を体現するためのものなのではないかと考える。

3-4. 個人的な設定による関係・人生の選択の違い

Aさんは、エステやエステで勧められている「ファンデーション使わない」化粧を実践し、「美容」を個人的な設定としている。また、Aさんのような化粧よりも「美容」という在り方が会社の中で認められており、同期や後輩とエステの話やファンデーションを使用しないことの話をする。

Cさんは、「化粧＝もう制服」などと捉えていることから、「制服」を個人的な設定としている。

AさんとCさんでは航空会社で働く年数は異なるが、肌との付き合い方や人間関係も変化することが分かる。

3-5. 身体論的な観点

(中略)「素肌」なるものが、化粧品を使って化粧することとの関連で現れてくる限りにおいて、わたしたちは「素肌」を持つのは「女性」であると言えるかもしれない。(上谷＝2006：158)

上谷(2006)は、「(中略)『素肌』を持つのは『女性』であると言えるかもしれない」(2006：158)と述べているが、身体論的な観点から、肌との接近と距離化についても考察することができると考える。Aさんは「ファンデーション使わない」肌との向き合い方から、化粧によるカバーはあまりせず、Aさんと肌は接近している。Cさんは化粧を重視している傾向があるため、肌へ化粧を施す向き合い方になると考え、肌とは距離化していると考え。

3-6. 「責任感」から「(責任感を伴う)美容」への変更

Aさんの化粧とは、「責任感」を持って行なう仕事を支えるものであり、かつ化粧が必要とされるなかで、推奨されている化粧をそのまま行なうものではなく向き合うものとして捉えているものと、2018年7月時点のまとめとしていたが、追加のインタビューの分析により、家族の中での設定が「美容」であることや、「ファンデーション使わない」という化粧をしていること、その化粧も含めた美容を通して会社内での関係性が築かれている面もあることが分かった。そのため、Aさんの個人的な設定は「(責任感を伴う)美容」であると改めることとした。

終 章

本稿の振り返りを行なう。まず、客室乗務員の化粧には細かな規則があり、会社の求める規定に沿った化粧を行なう必要がある存在であることから、規則に接しながら働く客室乗務員なら、

規則に沿った化粧をすることや、したくないという考えなど、様々な考えを持っていると考え、3名の客室乗務員・元客室乗務員を対象とした聞き取り調査を行うところから始まり、本稿ではそのうち2名の聞き取りを用いている。

1章について振り返る。前回の論文で人と人の関係における「距離化」を重視していたが、エリアスにおいては、客観的な視点を重視していた頃から、個人という、より人間及び人間関係を重視しているという変化の過程を考察し、石井の「対人的距離化スキル」・「対人的接近スキル」とエリアスの「参加と距離化」の概念は異なることを見てきた。しかし、エリアスで言う「自己規制の衝動」(Elias 1991=2000:134)、石井の場合は、メタ認知という概念が共通性があり、メタ認知や「自己規制の衝動」(Elias 1991=2000:134)は、個人的な設定と呼べるものであることを考察した。

3・4章において、具体的に2名の客室乗務員・元客室乗務員のインタビューの分析を行った。

ここで、インタビュー対象者それぞれの化粧を通じた関係性から考察する設定を見ていく。

Aさんにとっての化粧を通じた関係性から考察する設定は「(責任感を伴う)美容」という設定である。「(責任感を伴う)美容」という設定が、仕事を支えるものとして機能しており、かつ化粧が必要とされるなかで、推奨されている化粧をそのまま行なうものではなく向き合うものとして捉えている。Aさんは、メタ認知的に、自分の化粧について距離を置いて考え、自分にとって望ましい勤務時の化粧を達成しようとしていると考えられる。自身が行くエステを薦めることなどもあることから、遠い距離の傾向でありつつ、近い距離の部分もある。

Cさんの衣装要素に通じる化粧とのシンボリック的なものへの関心の高さとの関係性から考察する設定は「制服」である。目指す客室乗務員像に、化粧を積極的に活用し、かつその化粧を通して客乗務員を表現するという意味が込められていると考える。客室乗務員を化粧を行うことによって表現していることが特徴と言える。Cさんは、先述した衣装要素への関心の高さもあり、客室乗務員らしさを、より重視する傾向があると考えられ、客室乗務員らしさを表明する化粧との距離も接近して考えていると考察する。自分ではつけられないと思う色味の化粧品についての発言や化粧への違和感について述べている部分もあることなどから、自分の考える客室乗務員らしさや、自分の思う化粧に関して合わないものと距離を置く要素もあると考えられ、遠い距離部分もありつつ、近い距離の傾向だと考える。

あるルールに則った化粧と自分の好き・嫌いの化粧という考え方から、化粧を考察することは、どちらか一方の化粧について考察するだけではなく、それぞれの「(責任感を伴う)美容」「制服」という本人達が重視していることを通して考察する必要があることが分かった。あるルールに則った化粧と自分の好き・嫌いの化粧という考え方では、ルールに従わなければいけないが、提唱されている化粧はしたくない、逆にもっと行いたいといった自分の気持ちの葛藤に重きが置かれてしまうと考える。しかし、本稿が目指すもう一つの意味である距離化の視点で見ると、それぞれの個人的な設定とも呼べるような一人一人の「自己規制の衝動」(Elias 1991=2000:134)、メタ認知、客観的な視点などの働きが起こり、化粧を通じた関係性が築かれているということを発見できた。

また、Aさんは化粧をしていないことが自然な感じであるという意識を持っており、Cさんは化粧をしていることが自然な感じであるという意識を持っている。化粧をしていないこと・していることのどちらが本人にとって慣れ親しんだ設定であることが分かる。そして社会的関係を通

し、本人の化粧の個人的な設定に接近及び距離化していると言える。本人にとって慣れ親しんだ設定は、「自己規制の衝動」(Elias 1991=2000:134)、メタ認知、客観的な視点などのもう一つの意味の距離化要素を含んでいる。Aさんがインタビュー時点で勤務を続けていることや、Cさんがそうではないことは、個人的な設定との「もう一つの距離化」との関係も考えられ、「もう一つの距離化」の実際上の効果を示している可能性もある。

本論で特に注目したのはこの意味での距離化である。距離化には、少人数と大人数の間で起こることがあることを1章で検討した。メタ認知や「自己規制の衝動」(Elias 1991=2000:134)が、個人的な設定とも呼べるものであり、個人的な設定の中に、距離化が含まれ、それぞれ一人一人の設定が形作られていくことを考察した。本稿で見てきたもう一つの意味である「自己規制の衝動」(Elias 1991=2000:134)、メタ認知、客観的な視点といった距離化のもう一つの意味について考察することは、複合的で奥行きのある化粧を通じた関係性を発見する意義があると考ええる。また、メタ認知、客観的な視点といった距離化の視点、個人的な設定についてさらに研究していくことで、人生を含めたキャリアのより良い構築や、職場環境の改善につながる可能性がある。

〈文献〉

- 朝日新聞 DIGITAL 「〈4〉CAの身だしなみの極意」 <http://www.asahi.com/airtravel/column/happysky/TKY201>
(2019年6月23日閲覧)
- Bordo, Susan 1997 (First Paperback Printing 1999) *Twilight Zone : The Hidden Life of Cultural Image from Plato to O.J.*, University of California Press.
- Davis, Kathy 1995 (Transferred to Digital Printing 2008) *Reshaping the Female Body: The Dilemma of Cosmetic Surgery*, Routledge.
- 枝川 碧, 2018 「客室乗務員に見る化粧の可能性—接近と距離化のスキルという観点から—」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要第24号』, pp.33-43
- Elias, Norbert 1983 *Engagement und Distanzierung Arbeiten zur Wissenssoziologie I*, Suhrkamp Verlag. (エリアス, ノルベルト (著) (波田節夫 / 道簾泰三 [訳]), 『参加と距離化—知識社会学論考—』法政大学出版局, 1991年.)
- Elias, Norbert (edited by Schroter, Michael) 1991 *DIE GESELLSCHAFT DER INDIVIDUEN*, Suhrkamp Verlag KG (エリアス, ノルベルト (著), シュレーター, ミヒャエル (編) (宇京早苗 [訳]), 『諸個人の社会—文明化と関係構造 (叢書・ウニベルシタス)』, 2000年.)
- Hochschild, Arlie Russell 1983 *THE MANAGED HEART: COMMERCIALIZATION OF HUMAN FEELING*, University of California Press. (ホックシールド, アーリー・ラッセル (石川准・室伏亜希 [訳]), 『管理される心—感情が商品になるとき』世界思想社, 2010年.)
- 石井 佑可子, 2006 「社会的スキル研究の現況と課題:『メタ・ソーシャルスキル』概念の構築へ向けて」『京都大学大学院教育学研究科紀要 52』, pp. 347-359
- 石井 佑可子, 2011 「対人的接近—距離化スキルの機能—相手との関係性別分析—」『東京大学大学院教育学研究科紀要 50 巻』, pp.111-118
- NARA UNIVERSITY OF EDUCATION, 2011 「奈良教育大学 平成22年度奈良教育大学学長裁量経費補助研究成果報告 メタ認知の概要 メタ認知とそのはたらき」 <https://www.nara-edu.ac.jp/CERT/nara-edu/outline//> (2020年9月12日閲覧)
- 上谷香陽, 2006 「化粧における『身体』——〈素肌〉の社会的構成——」『立教大学 応用社会学研究 2006 No.48』, pp.153-161.
- 吉澤夏子, 1997年 (2013年 POD版) 『女であることの希望—ラディカル・フェミニズムの向こう側—』勁草書房.

表 1-1. 遠い距離・近い距離・全体像対応表

	遠い距離部分 (『自己規制の衝動』(Elias1991 =2000:134), メタ認知, 客観的 な視点と行った距離化の視点)	近い距離部分	総合した全体像
Aさん インタビュー発言内容 個人的な設定:「(責任感を伴う)美容」 Aさん(インタビュー時30台前半)への2度目のインタビューは、2018年9月に実施した。インタビューの場には、Aさん、筆者がいた。Aさんは、大学卒業後、航空会社にて客室乗務員として勤務。勤続年数は、10年以上。	(a-4):客・先輩からの見え方を考慮していると考えられ遠い距離	(a-1):化粧に興味を持ち化粧との関係性に近いと考えられ、近い距離。	・Aさん本人は化粧に積極的というわけではなく、自分の肌状態を良好に保つ化粧法を行っているが、先輩など周りの自分に対する化粧の見え方も考慮。エステを勤めることもあり、自分の化粧法を保ちつつ勤務をしている。 客室乗務員らしい化粧とは距離を置き、かつ客観的に自分の化粧の見え方も考える。 ⇒遠い距離の傾向でありつつ、近い距離部分もある
		(a-2):化粧品会社からのレクチャーを参考に、サンプルに近い色を探そうとする様子が伝わることから、化粧との関係が近いと考えられ、近い距離。	
		(a-3):自分の思う化粧法を行っていると考えられ近い距離	
Cさん インタビュー発言内容 個人的な設定:「制服」 Cさん(インタビュー時30台後半)へのインタビューは、2018年3月に行なった。インタビューの場には、Cさん、筆者の2名がいた。Cさんは、大学卒業後、大手企業に勤め、その後航空会社にて客室乗務員として勤務後、退社。航空会社での勤続年数は数年。	(c-2):自分の思う化粧との距離が見られ、距離を置く要素として遠い距離。 (c-5):自分ではつけられないと思う色味の化粧品についての発言があることから、自分の考える客室乗務員らしさとは合わないものと距離を置く要素として遠い距離。	(a-6):自分の思う肌の状態を勤めていると考えられ近い距離。	・Cさん自身が化粧を積極的に活用(個人的な設定・化粧との関係性に近い距離) ・客室乗務員として求められる客室乗務員らしさ・客室乗務員らしい化粧に対応するプロとしての気持ちと制服要素への親和性により、化粧との関係性に近い距離 ・Cさんにとっての「化粧=(イコール)もう制服」には、Cさんの内面的な人物像を表から補強したり、内面的な人物像を体現するためのもの ⇒遠い距離部分もありつつ、近い距離の傾向
		(a-7):自分とは異なる化粧への評価もあるが、自分の思う肌の状態を勤めていると考えられ近い距離(a-6と共通した発言)	
		(c-1):化粧へ近づいていると考えられる点で近い距離。	
		(c-3):化粧を積極的に活用していると考えられ近い距離	
		(c-4):客室乗務員らしさに近づくために、先輩のアドバイスを受け入れていることから、近い距離	
		(c-6):安全上の観点と、「不快感を与える」ということからの判断はCさんが顧客に対して、安全で快適な空間を提供したいという考えを表現するために、客室乗務員としての自分(プロとしての自分とも言えるだろう)でいるlptpができないと判断していたのではないかと考え近い距離。	
		(c-7):憧れに近づくことで恐れも出ていると考えられ近い距離部分。	
		(c-8):客室乗務員になるという夢を叶えることによって、自分へのさらなる自信を身につけていたのではないかと考える点で近い距離。	
		(c-9):衣装要素への接近と考えられ近い距離。 (c-10):衣装要素への接近と考えられ近い距離。 (c-13):衣装要素への接近と考えられ近い距離。	
		(c-11):Cさんにとっての理想像を表す存在が客室乗務員であると考え近い距離。 (c-12):Cさんにとっての理想像を表す存在が客室乗務員であると考え近い距離。	
		(c-14):自分を表現する一環として化粧が行われていると考えられる点で近い距離。 (c-15):化粧への好き嫌いより、衣装要素への統一感として化粧を考えている点で近い距離。	

※本論インタビューにAさんのインタビュー引用部分は(a-○)、Cさんのインタビュー引用部分は(c-○)としている。インタビュー引用部分の会話全体から遠い距離部分・近い距離部分を考察しているため、本論インタビュー引用部分を参照しつつ、本表を参照のこと。

〈注〉

- ¹ 本稿で対象とするのは旅客機で仕事を行なう客室乗務員である。以降は「客室乗務員」と表記する。
- ² A さん（インタビュー時 30 台前半）への 2 度目のインタビューは、2018 年 9 月に実施した。インタビューの場には、A さん、筆者がいた。A さんは、大学卒業後、航空会社にて客室乗務員として勤務。勤続年数は、10 年以上。
- ³ C さん（インタビュー時 30 台後半）へのインタビューは、2018 年 3 月に行なった。インタビューの場には、C さん、筆者の 2 名がいた。C さんは、大学卒業後、大手企業に勤め、その後航空会社にて客室乗務員として勤務後、退社。航空会社での勤続年数は数年。